

以下は、1982年に『ロンドン暮らしのハンドブック』を創刊以来、婦人会ハンドブック活動の中心メンバーだった森嶋瑤子による読者の皆様へのご挨拶です。このメッセージの想を引き継ぎ、婦人会有志により活動を続けてきましたが、紙版の発行は2022年に終了いたしました。今回日本クラブ様のご厚意により、ウェブサイトへ公開させていただきます。

公開に先駆け、2024年12月現在のデータに基づき内容を更新しましたが、今後の更新はございません。このPDF版ハンドブックはあくまでも2024年12月現在の情報を記録した歴史的な記録に過ぎず、その内容の一部は将来、既に古い情報となっている可能性があるため、その正確性を保証できません。

従って、実際に行動をされる場合には、必ず公式情報などによって現在の状況を確認され、それに基づいてご自身で判断をされて行動されてください。

特にNHS制度、GP登録方法、処方箋、健診、学校の入学制度や申請方法、学期の仕組み、VFSによるビザ申請、滞在資格証明の取得手順、銀行の利用方法、税制、レート情報、コロナ禍以降の現金非対応店舗などの商習慣、各種届出の期限、大使館の業務などは常時変更されており、英国日本人婦人会および日本クラブは一切責任を負いかねますので、ご自身で必ず慎重な現状確認をお願いいたします。

またハンドブックに記載されている医療機関、学校、電話会社、不動産業者、食料品店、スーパー、オンラインショップ、その他の特定の機関や店舗などは既に存在していない可能性もありますこと、ご了承ください。

加えて、法律アドバイス、医療アドバイス、保険アドバイス、金融アドバイス、税務アドバイスを提供するものではなく、各分野の専門家のアドバイスを受けられることを強く推奨致します。

その旨どうぞご了承いただき、多くの皆様にご参考いただけることを願っております。

～英国日本婦人会ハンドブックチーム一同～

はじめに

たとえ数年間でも生活の本拠をこの国に移して暮らす方に英国日本婦人会のメンバーの経験を役立てて頂ければ、という気持ちがこの小冊子を発刊する動機でした。1982年に手書き原稿のビロックスコピーで始った創刊号以来、5回の大改訂と増刷の際の数多くの小改訂により、目まぐるしく変わる情報やIT技術の目覚ましい進歩におくれないようにと努力を重ねて参りました。2001年の第4回大改訂でパソコン入力に切り替え、同時に表紙のデザインも一新しましたが、生活経験に基づくまめ細かい生活の知恵を盛り込んだ手引き書という点には変わりありません。

情報の量は増す一方ですが、他方では日本語の情報紙読むも種々ありますし、インターネットを使えば、情報は手軽に、かつ自由に得られるようになりました。同時に他では得られないような生活情報がこの小冊子で得られるというのなら、この上ない喜びです。今後もご利用者の皆様からのご批判やご提言を参考にして、訂正や追加を怠らず、より使い易く役立つハンドブックに育てて行きたいと願っています。連絡は下記の婦人会のメールアドレスにお願いします。

日本人在住者の多いロンドンの事情に多くのページを割いていますが、基本的には英国生活の手引き書でありますので、他の地域に在住の方々にも役立てて頂けると幸いです。

なおこのハンドブックに掲載されている商品名、商店名その他は、純粋に皆様の便宜のための情報で、決して広告でも婦人会の推せんでもないことを承知下さい。英国日本婦人会は正式登録された英国チャリティ法に基づくチャリティ団体で、ハンドブック出版は有志の会員によるボランティア活動の一つです。どうか無断でコピーをなさらないで下さい。



英国日本婦人会
The Japanese Women's Association
in Great Britain since 1956

英国日本婦人会
(Charity No. 294386)
jwahandbook@gmail.com

英国での教育

「子どもが英国で教育を受ける」ことを考える時、一番大切なことはその子どもの将来像を展望することである。親は、その子どもが長期に渡って英国で教育を受けるのか、短期あるいは一時的に教育を受けるのかをじっくりと考える必要がある。一律的な日本の学校制度とは大きく異なり、英国での教育制度の選択肢は多岐に渡るため、その最初の着眼点によって学校選択自体が変わってくる。場合によっては、子どもにより良い教育環境を与えるためにまず学校を選び、その後に住まいを定めなければならないことも生じるであろう。また、学校選択をした後も、それがその子どもにとって適切であるかどうかを絶えず検証することも大変重要である。両親は幅広く様々な情報を手に入れ、それを冷静に判断すると共に、自分の子どもについての情報も整えておくことが大切である。

1. 一般的なこと

子どもの年齢によって多少の違いはあるが、英国で受けられる教育は基本的には次の5つに分けられる。

どの教育を受けさせるかは、その子どもの将来像を十分考慮して決めることが重要。

- ①日本の教育システム内での教育(日本語で受ける)
- ②英国の教育システム内の公立学校での教育
- ③英国の教育システム内の私立学校での教育
- ④インターナショナル・スクールでの教育
- ⑤ホームスクーリング、ホームエデュケーション:学校に通わず(理由は様々)、家庭での学習指導をする。 www.gov.uk/home-education

年齢による学校区分の日英比較は大体下記のようにになっている。

日本		義務教育																					
学年	幼稚園	小学校						中学校			高等学校			大学または短大									
		1	2	3	4	5	6	1	2	3	1	2	3	4 年または 2 年									
歳 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22																							
英国		義務教育																					
Year (学年)		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11											
公 立	Nursery School	Infant School		Junior School		Secondary School						6th form		大学 3 年または 4 年									
		Primary School																					
私 立	PrePrep School	Preparatory School				女子 Public/Senior School Day/Boarding																	
						男子 11 才 Senior School Day/Boarding																	
						男子 13 才 Public School Day/Boarding																	

英国の義務教育は5歳で始まり16歳で終わるから日本よりも長い。日本では全国一律に、また公立も私立も同じように年齢による学校の区分が決められているが、英国では公立と私立では区分が異なり、また地方自治体により少し違うことがある。

(特にスコットランドはシステムが違う。詳しくは P. 10)

新学期は9月に始まり、秋、春、夏の3ターム(Term 学期)制。週5日制で、土・日が休み。(私立校の中には土曜日も、午前は授業、午後はスポーツの試合に充てる学校がある。)各タームの合間に、クリスマス休暇(冬休み)、イースター休暇(春休み)があり、夏タームが終わると、そのアカデミックイヤー(学年)が終了し、夏休みに入る。この1年3回の長い休みのほかに、各タームの半ばにハーフターム(Half Term)の休みがある。期間は約1週間。但し、日本の教育システムの学校は、日本と同じように4月に学期が始まり、ハーフタームの休みはない。この他、私立校の中には、ハーフタームの前後に長い週末休み(Exeat)があるところもある。

日本における海外からの帰国生受け入れ状態は年々変わってきているし、私立校の海外校もあるので、教育情報も目まぐるしく変わっている。教育情報の機関や個人的教育相談の機関もあるので、希望者は連絡すること。(P. 18 参照)

一方、英国でも教育事情は最近いろいろと変わってきている。義務教育終了時に必須科目と選択科目の GCSE(General Certificate of Secondary Education)試験を受けるこれまでのアカデミックな教育の他に、企業が求める人材の教育の為、実社会での実習と学校での学習を複合したシティアカデミーが各地に設立されている。国の指定している基本的なカリキュラムに基づいて数学、科学、英語は履修するが、舞台芸術と密接した専門分野の教育が中心となる。英国の公立校・大学事情に関しては、British Council(www.british.council.org)に問い合わせると良い。

英国の学校では、校長が全生徒のことについて相談を受けることになっている。担任の教師を通じずに、アポイントを取って校長と面接することができる。大学への進学時や転校時などの推薦状も校長が書くので、校長は各生徒の情報にも詳しい。同時に、両親の側も校長に子どものことについて相談したり、質問したりして、連絡をよくしておくことも大切。英国の学校に入学した子どもが、学校になじまなかったり、転校したがつたりした場合は、早く校長に相談すること。せっかく入学させてもらったのだから転校を申し出たりするのは心苦しいというような遠慮をせず、早く校長と話し合っって子どもにとって適切な解決策を探す。学校によっては、学期の終わりに、先生やスタッフに商品券、ワイン、チョコレートなどのプレゼントを送る習慣があるので入学後によく情報を集めること。

2. 日本の教育システム内での教育

英国内では、小学校1年生から義務教育終了まで日本の教育システムの中での学校教育を受けることが可能である。現在のところ下記の諸校が日本の教育システムの中にあり、義務教育を終了することができる。(高等学校教育を受けられる所もある)受け入れる学年、授業料その他の条件も各校で違うので、直接学校に問い合わせる。

日本帰国の際、これらの学校からの帰国児童や生徒は、いわゆる海外帰国子女扱いを

受けず、国内での転校や進学並み(あるいはそれに準じるもの)に取り扱われる場合が多いので、その点について留意する。

(1) ロンドン日本人学校 The Japanese School in London

<https://www.thejapaneseschool.ltd.uk/nihonjingakko/>

電話:(020) 8993-7145

e-mail: ron-nichi@thejapaneseschool.ltd.uk

住所: 87 Creffield Road, Acton, London W3 9PU

- ・Piccadilly 及び District 線の Ealing Common 駅下車徒歩12分
 - ・Central 線の West Acton 駅下車徒歩9分
 - ・小学1年から中学3年まで。全日制・男女共学。通学バスの利用可能。
- 入学に関しては教頭に問い合わせる。

[転入学手続き]

<必要書類>

- ①在学証明書(出国前に在学中の学校で用意してもらう)
- ②入学願書(同校所定のもの)
- ③児童生徒家庭環境調査票(〃)
- ④児童生徒に関する調査票(〃)
- ⑤写真2枚(縦 4.5cm×横 3.5cm)
- ⑥連絡・返信用封筒(A4、住所・氏名を記入、First Class の切手を貼付)
※但し、学期途中の転入学は封筒不要
- ⑦教科書 出国前に、海外子女教育振興財団 <http://www.joes.or.jp> にて給付を受け手荷物として持参する。進級後は同校にて支給される。
東京 (03) 4330-1349 大阪 (06) 6344-4318 (P. 18 参照)
- ⑧誓約書 入学許可書を発行するときに用紙を渡されるので、その後に提出する。

<出願方法>

- ①上記必要書類を郵送または持参する。
- ②願書受理時点で志望者がまだ英国にいない場合は仮受付とし、志願者が英国に到着し、同校に申し出た時点で正式な受付となる。
※入学資格、入学条件などについては直接問い合わせる。

(2) 立教英国学院-Rikkyo School in England

<http://www.rikkyo.co.uk>

Guildford Road, Rudgwick, West Sussex, RH12 3BE (01403) 822107

・小学5年から高校3年まで。全寮制・男女共学。

(3) Teikyo School, U.K. (帝京ロンドン学園) <http://www.teikyofoundation.com> (01753) 663712

Framewood Road, Wexham, Buckinghamshire, SL2 4QS

- ・高校高等部男女共学・通学と寮の選択可能。
- ・通学の場合は、メトロポリタン線 Uxbridge 駅から通学バス運行。

(4) Winchester Shoen College (ウインチェスター頌栄カレッジ) <http://www.shoen.ed.jp> (01962) 855454

Chilbolton Court, off Marnhull Rise, Winchester, Hampshire SO22 5HF

- ・日本人女子学生のための2年制短大。
- ・卒業生は他の英国の大学の2年生に編入でき、学位取得が可能。

3. 補習授業校 The Saturday School

<http://www.uk.emb-japan.go.jp> (大使館)あるいは <http://www.mext.go.jp> (文部科学省)を参照。

原則として、英国の現地校に通学している子どもたちに、帰国後の学生生活に順応できる素地を養うため、学習指導要領に準じた国語教育をすることを目的にしている。小学1年から高校3年までを対象にした日本語の補習授業が毎週土曜に開かれている。情報の欲しい方、入学手続きをしたい方は、ロンドン補習校に直接問い合わせること。ほかの地域の場合は連絡先の運営委員会が毎年持ち回りで変わる。各補習授業校のホームページがあるので参照のこと。

(1) ロンドン補習授業校

<http://www.thejapaneseschool.ltd.uk/londonhoshuko/top.html>

e-mail: sat-london@thejapaneseschool.ltd.uk

住所: 87 Creffield Road, Acton, London W3 9PU

下記の3校舎で授業を行っている。ただし小中学部は3ヵ所全部にあるが、高等部・日本語科(第2言語として日本語を学ぶ子どもを受け入れる)はアクトン校舎だけ。

- ・アクトン校舎: 上記の The Japanese School (日本語科・小・中・高)
- ・ブレント校舎: c/o Whitefield School, Claremont Road, London NW2 1TR
- ・クロイドン校舎: c/o Croydon High School, Old Farleigh Road, Selsdon, South Croydon, CR2 8YB

(2) スコットランド補習授業校(The Scotland Japanese School)

<https://scotlandjapaneseschool.com/site/>

e-mail scc.hosyuko@gmail.com

(3) 北東イングランド補習授業校(North-East of England Japanese Saturday School)

<https://neengland-hoshuko.jimdo.com/>

e-mail neengland.hoshuko@gmail.com

(4) マンチェスター補習授業校(Manchester Japanese School)

<http://www.manchesterjs.org.uk>

e-mail admin@manchesterjs.org.uk

土曜日のみ、07827-412871

(5) テルフォード補習授業校(Telford Japanese School)

<http://www.telfordjs.business.site>

e-mail telfordjs@gmail.com

(6) ダービーシャー補習授業校(Derbyshire Japanese School)

<http://www.derbyshirejs.co.uk>

(7) ヨークシャー・ハンバーサイド補習授業校(The Yorkshire and Humberside Japanese School)

<http://www.yhjs.uk>

e-mail yorkshirehumbersidejs@gmail.com

(8) ウェールズ日本人補習授業校(Japanese School in Wales)

<http://www.walesjapanclub.com>

e-mail (ウェールズ日本人会) webmaster@walesjapanclub.com

(9) ケント日本語補習授業校 (ケント日本人会が母体となって運営)

<http://www.kentjapaneseschool.org.uk>

Ofsted(オフステッド): Office for standards in education

英国の教育監査局。全ての教育・児童組織を基準以上の質を保っているか、強制的に監査する教育機関で、政府からは独立した外部組織。定期的に教育関連施設の運営状況を視察して評価、指導をしている。査察の報告書はウェブ上で公表されている。 <http://www.gov.uk/government/organisations/ofsted>

4. 英国の公立学校

<http://www.gov.uk/browse/childcare-parenting/schools-education>

英国では公立校のことを **State School** と呼び、一般には各地方自治体が管理している。しかし自治体管理でなく教育・技能省管轄の学校や、**Church School** (各宗派の教会関係の学校) も含まれている。また、日本と異なり、地方自治体ごとに多少システムが違っていることもある(例えば、年齢による学校区分や入学手続きなど)。

5歳~16歳までが義務教育。公立校はその年齢の子どもを受け入れる義務があるが、定員を超えて受け入れることは出来ない。公立校は日本と同様、区域制が原則。住居が決まれば自治体(カウンスル)に入学を申し込む。自宅から一番近い学校への入学が優先されるが、数校の中から選択できることもある。その時はそれぞれの学校を見学し、必要ならば校長に会って話し合い、納得してから決めるようにする。公立校でも校長の方針が学校の教育方針に相当影響を与えているのも、英国の特長である。評判の良い学校に途中から編入するのは難しい。近所の学校が満員の時は、遠くの学校へ行かねばならないこともある。居住地区の学校リストは各カウンスルの HP の **Education/School** ページを参照。

(1) プライマリースクール **Primary School** (Reception・Year1~Year6)

日本の小学校にあたる。公立校は4歳からレセプション **Reception** に入学する。(9月~8月末までの4歳になる誕生日を迎える年。) 5歳になる年からプライマリースクール入学 (**Year1**)。校舎が **Infant School** (Reception-Year2) と **Junior School** (Year3-6) に分かれている学校もある。

[入学手続き]

公立校は、居住するカウンスルのオンライン、もしくは学校指定のアプリケーションフォームで申し込む。レセプションは小学校に付属している。レセプション学年は、義務教育ではないが小学校生活準備のための学年として位置づけられ、小学校入学手続きはレセプション入学時にするシステムになっている。最近は入学申し込みが評判の良い学校に殺到する為に学校が受け入れる生徒定員数をはるかに超えるので、人気校への入学は簡単ではない。**Church School** への申込は教会からの推薦レターが別途必要となる。通常、自宅~学校までの直線距離(近さ)が優先される。また兄弟が通っているとその弟妹は入学を優先されることもある (**Siblings rule**)。第一希望校に外れた場合でも、**Waiting list**(順番待ち名簿)に登録し、他の学校に通いながら、順番が来るのを待つこともできる。学期の途中転入の場合、学年の定員に欠員が出るまで自宅待機になることもある。公立では、通学する学校の指定された区域内に居住していることが条件なので希望校のそばに転居することもありえるが、居住期間も考慮される場合があり、引っ越せ

ばすぐに希望校に入学・転入できるという保証はない。英国では日本のような入学式はない。新しい学校が開校されたり、既存の学校が増学級になる場合、レセプション学年のみの入学受付から始まり、数年かけて、学年、学級数がそろそろ形になる。

【公立学校生活 全般】

公立校の授業料は無料。授業で使う本類・ノート・教材類も基本的には支給される。1クラスの定員は30名。授業は担任と、ティーチングアシスタントの2名体制で進められる。日本のように全国一律で使う「教科書」という形はなく、ナショナルカリキュラム(指導要綱)に沿って、各学校で適宜な本、資料を使いながら授業が行われる。授業目標は通常学校のホームページに記載されているし、詳細はタームごとに連絡される。

<http://www.gov.uk/government/collections/national-curriculum>

昼食は選択制で給食(School Dinner/Meal)を取っても、お弁当(Packed Lunch)を持参してもよい。給食の場合はオンラインで学校指定先に給食費を納める。(ロンドン市長の政策のもと、2023年9月より一年間はロンドンの公立小学校の全ての児童に対し、給食費の無償化を実施。2024年9月以降も継続される。動向を確認すること。)

英国ではナッツアレルギーや乳製品アレルギーの子供が多く、クラスに重度アレルギーの子供がいる場合、お弁当にナッツ類を入れるのは禁止されている場合がある。重度アレルギーの場合、アレルゲン(原因物質)を少し食べたり、吸い込んだり、触れるだけでショック症状を起こし、呼吸困難になり、死に至る危険もあるので、アレルギーの危険性については子供にも周知させておくことが大切である。

学校には制服がある。学校のロゴのはいった制服や体操着(PE Kit)は学校指定の店で買うが、M&S や Tesco などの大手スーパーで購入できる標準型の制服を取り入れている学校が多い。その場合、学校のスクールカラー指定がある。

日本から転入学した場合、英語のハンディキャップのため、下のクラスに編入されることがあるが、英語に慣れてくると、先生が年相応のクラスに進むようにしてくれる。

一般に、公立校では子どもを学力別グループに分け、それぞれのグループに適した問題をさせたりして、個人の能力を見るようにしている。宿題は少ないが、毎日の読書・音読(Reading)は推奨しており、読書用に個人の学習レベルにあわせた本を学校から持ち帰ってくるので、低学年のうちには一緒に読んで、読書習慣をつけるとよい。生徒集会は Assembly という。学校によっては EAL(English Additional Language)の教師を使って語学補習を行ってくれることもある。

ロンドンの公立校は多国籍文化のバックグラウンドを持つ子供たちの集まりなので、互いの文化を尊重し合う気持ちが大切。いじめ(Bullying)は、すぐに担任、校長に相談する。校内で時間外の学童保育(Breakfast club (朝の授業前)、After School Club(放課後))を提供している学校は多い。外部提携によるものは有料。

保護者が先生と懇談する会は Parents' Evening といい、タームに一度、夜に行われる。生徒の授業学習ノートは Book とよばれ、通常家に持ち帰ることはないので、この機会に Book を見ることができる。正式な授業参観日はないが、希望すれば出来る。Coffee

Morning、Open Day、Parents' Meeting など、先生や他の保護者と子どもの学習、生活、進学などを話し合ったり相談できる集まりがある。PTA のある学校もあるが多くはない。

保護者主催のバザーなど Fund Raising(資金集め)の催しは多い。チャリティ団体への寄付や学校の運営活動費などに充てられる。

先生が子供を褒めて、長所を見つけ働きかけてくれるのが、英国の学校の良いところ。学習成績の評価は年度末(7月)に Annual report として渡される。

帰国子女での受験を考えている場合には、在籍時の成績を保存し、受験校の必要書類について確認しておくこと。

登下校時の同伴送迎は保護者の義務。10歳以上(Year5・6)では、自宅が学校近隣の場合に限り、子供一人での登下校も申請許可制で認められる学校もある。

学校は毎朝、出欠を取り(Register という)、学校全体の出席率を公表している。学期中の旅行(ホリデー)のための欠席は、原則禁止で、無断欠席扱いになり、学校は保護者に罰金を課すことができる。(Term Time Holiday Fines) どうしても必要なときは事前に校長の許可を得ること。

公立校では夏タームの5月に Year2、Year6 で SATs(全国統一テスト)を受験する。テストの結果は学校単位の平均が公表されている。(Performance Table・League Table)

(2) セカンダリースクール Secondary School (Year7~Year11)

自治体によって、選抜試験により、試験に合格した生徒だけが進学するグラマースクール Grammar School(ロンドン近郊では、Barnet、Bexley、Bromley、Enfield、Redbridge、Sutton 区など) と日本の公立中学と同じく、地域制で入学できる

Comprehensive School(=State Secondary School)がある。Year6 の10月末までに、居住するカウンスルのオンラインサイトから申し込む。(第6希望まで記入できるが、優先順位は自宅ー学校の直線距離。) 最近は専門分野を中心に教育する

Technology Academy 学校が設立され、受け入れ生徒の10%は、選抜試験による。

財政の面で自治体の管轄でなく、国の財政援助を受け、かつ業界からの財政援助で経営され、業界で求める人材の養成が目的。学校の経営は、融資する民間企業の援助力次第である。長年同じ学校で一貫して学ぶことになり、それが生徒にふさわしいかが今後の課題になる。グラマースクールは男女別学が多いが、多くの公立校は共学。

Comprehensive の特長は、あらゆる能力の子供を収容しそれぞれに適した教育を与える(Comprehensive は包括的という意味)点にあり、従って科目もアカデミックなものだけでなく、実用的なもの(例えば、IT、工作など)も含まれ、科目の選択範囲が広い。そのため学校の規模も比較的大きい。中卒で就職につけるよう職業教育が始められ、職種資格 Vocational Qualification の BTECs・NVQ を取るクラスもある。

全ての生徒は14歳から(ウェールズでは11歳より、スコットランドでは年齢は問わない)キャリアアドバイスを受けることが出来る。

日本の中学校から転校して来た場合、英語習得のためにより多くの努力がいるかもしれないが、他方、数学や理科系の学科は日本の方が進んでいたりして、英語力が少々不足でも充分力を発揮することが出来る。年齢が14～15歳だと、GCSE 試験の準備をするためには語学不足ということで、入学が難しい学校もある。

公立、私立ともに Year 11 (15～16歳)の夏ターム(6～7月)に全国一斉に行われる GCSE 試験を受けて義務教育が終わる。試験の結果は8月半ばに発表され、各自に通知される。GCSE の採点はペーパー・テストの結果だけでなく、2年間にわたるコース・ワーク (Year 10 と Year 11) の点、すなわち平常点も最終点に加えられる。従って授業方法や教材などいろいろ改良されている。試験の結果は、9段階の Grade (グレード) に分かれる。(Grade9 が最高、Grade1 が最低で、例年 Grade7～9 を取得できる生徒は全体の 20%弱。6th Form に進むには、Grade4～5 以上の成績が必要とされる。)

この GCSE のグレードと科目数は2年後の大学進学に大きな影響を及ぼすので要注意。就職する際に履歴書 CV (= curriculum vitae ラテン語由来) に記入することさえある。公立校の GCSE の結果は、学校平均が公表されている。

(3) 6th Form

日本の高校にあたる部分で2年間のコース。主として General Certificate of Education (GCE) の Advanced GCE Levels (A レベル/AGCEs) の試験に備えて勉強する。大学に入学、就職の条件を良くするためには、A レベルの試験にパスしなければならないが、大学が入学の条件として要求しているのは最低3科目の試験結果なので、通常の学生は3科目以上取っている。Oxford/Cambridge を受験する生徒は、4～5 科目取っている場合が多く、通例非常に高いグレードが要求される。

A レベルは通算で2年間履修し、最後に一度だけ A レベルの試験を受験するが、その過程で mock test (模擬試験) を何度も受験するのでその結果が 6th Form での内申点となり、また大学によっては、A レベル試験前に学部ごとの aptitude test (大学進学適正試験)、エッセイ提出や面談を課す。このように、多くの大学は、8 月の A レベル試験最終結果発表前に GCSE の結果や 6th Form 在学中の内申点や大学によっては aptitude test、エッセイ、面談などを考慮しながら入学選考を行い、合格判定を行う。合格判定には、A レベルの試験結果を踏まえた条件付きの場合と試験結果を問わず入学を認める判定の二通りがある。

多くの公立校は 6th Form を併設しているので、義務教育修了後も引き続き同じ学校で勉強できるが、A レベルの試験科目は大変広い範囲にわたっており、(受験科目として日本語が選択できる場合もある) 学校によって A レベル準備のために履修できる科目数が違うので、希望科目のある学校へ移らなければならない場合もある。公立・私立に問わず、他校の 6th Form に移ってもよい。

6th Form は義務教育ではないが、公立校は高等教育機関に進学する16歳から19歳まで2年間授業料はいらぬ。ただし、GCSE 試験結果により、A レベル試験を受ける

能力に達していないと判断された場合には受け入れてくれない。

6th Form 単独の教育機関としては、公立の 6th Form College および私立の 6th Form College や Tutorial College がある。

前述の Secondary School に付設された 6th Form とこれらカレッジとの違いは、程度の差ではなく、科目の種類にある。前者ではいわゆる学問的という科目が主流だが、カレッジでは職業教育的な科目 (BTECs, T-Level) も取ることができ、幅が広い。公立でもカレッジは授業料を払うこともある。

2年間の 6th Form のコースの終わりに、全国一斉に行われる A レベル試験を受ける。6、7月に試験があり、8月半ばに結果が発表され各自に知らされる。合格者は A*・A・B・C・D・E・U の5段階で採点されている。数学科目に限定して、優秀な学生の為に A レベルより高い Advanced Extension Award(AEA)試験が導入され、合格の採点評価には Distinction・Merit・Unclassified がある。

6th Form への入学の手続きは志望校に直接するが、まず志望校に志望科目があるか否かを確認する。中学までの成績や GCSE の結果などを揃えて校長に入学手続きをする。日本のように機械的に合格・不合格が決められるのではなく、個々のケースについて、校長が推薦状なども参考にして判断する。特に日本人生徒はどうしても英語力に欠けるので、理数系に偏りがちになり、科目の選択も限られる。今までに受けた教育や英語力などについての個人差は大きいので、一般的基準を簡単に決めることができない。A レベルにパスし、英国の大学に入学する資格を取っていれば、日本の海外子女受け入れ制度のある大学を受験する資格がある。

(4) スコットランドの教育システム <http://www.gov.scot/education/>

イングランドとウェールズは同じ教育システムだが、スコットランドは独立のシステムを取っている。もちろん、両者は密接な関係にあるから、転校や進学には支障はない。義務教育が5～16歳であることは変わらないが、年齢による学校区分が異なり、試験が違う。

(a) Play group (3歳から)、Nursery (4歳から) は各地にあり、無料。

(b) Primary School は7年制。5歳から14歳までは A から F までの6つのレベルのカリキュラムに分かれていて、テストは各児童の習得の状況に合わせて先生が随時行う。

(c) Secondary School は12歳で入学する。6年制。14歳から16歳の間に Standard Grade を受験する。16歳の義務教育修了時に Scottish Qualifications Certificate の Standard Grade の試験を受ける。

(d) 義務教育以後も学校に残る生徒は、1年後に Intermediate または Higher Grade の試験を受ける。これは A レベルより易しく、科目数も一般に多く取る。

Curriculum for Excellence (3歳から18歳までの一貫したカリキュラム教育) を参照。 <https://education.gov.scot/>

(e) 大学進学希望者は、そのまた1年後に Advanced Higher (元 CSYS) の試験を受ける。Higher Grade と Advanced Higher とで A レベル同等とみなされる。

Standard Grade の試験を受けた後に、A レベルコースを取ることも可能。

(f) 大学は3～4年制。

5. 英国の私立学校

英国では私立学校は **Independent School** または **Private School** と呼ばれ、いわゆる **Public School** もこの中に入る。授業料は有料。

以下のサイトなどで学校検索できる。

① <http://www.schoolsearch.co.uk>

② <http://www.goodschoolsguide.co.uk>

③ <http://www.isc.co.uk>

私立校は英国内で大小取り混ぜて 2,500 校もあるといわれ、(このうち **Independent School Council**[ISC 全英私立学校協会]に登録してある私立校は 1,300 校)それらは学校の規模、教育方針、宗教、学問的スタンダード、寮の有無などいろいろな意味で千差万別なので、一般論をいうのは大変難しい。従って自分の子どもに適した学校を選ぶことが大切となる。入学させたい時期になる前からできるだけ情報を集め、いろいろな学校を見学することが大切。「教育関係の情報を得るには」(P. 19)に私立校の情報提供機関や相談所、参考資料について掲載。

私立校の教育システムは、学校長の方針が大きく影響する。大半の学校では、GCSE、A レベル試験に備えての教育をしているが、近年、A レベルの代わりに **International Baccalaureate**(IB)の試験を受けられる学校が増加しつつある。学校によっては A レベル/IB の選択制を取り入れている。

私立校では男女別学が多いが、近年、歴史のある私立校でも共学化する学校も増えてきている。男子校の **Public School** は **6th Form** に女子を受け入れる学校が多くなっている。公立校から私立校に転校することもその逆も可能。

学校によっては、日頃の学業成績や GCSE の結果により **6th Form** へ進めず転校させられることもある。宗教的理由で他宗派の生徒数を一定割合に抑えたりする学校もあるし、スポーツ・音楽・美術の教育にも力を入れ、課外活動が多くある。

パブリック・スクールと呼ばれるのは、14世紀から19世紀に設立された学校で、中には”The Nine”と呼ばれる歴史の古い名の通った学校もある。

毎年 **Financial Times** などの新聞に発表される A レベルや GCSE 試験結果に基づく成績番付表 (**League Table**) やインターネットで公表されている ISC (全英私立学校協会 P. 19 参照) のランキングは学校選択の参考になる。

(1) Preparatory School (Prep School) プレップスクール

Public School 入学前に行く学校は **Preparatory School** あるいは略して **Prep School** という。共学と別学がある。男子は5歳(あるいは6歳)から13歳まで、女子は11歳まで。中には、13～18歳の本校に付属した **Prep School** がある。**Prep School** の情報を得る時は入学可能年齢についてよく調べる。多くの学校は **Open day**(学校説明会)を年に1～2回開いているので希望校に見学に行くとよい。大きい学校は、私立校の全国リス

トに出ているが、中には個人の住宅かと思われるような小さな学校もある。

入学手続きは、希望校の校長宛てにメールか手紙で問い合わせ、面接を申し込む。問い合わせる際、親の職業、その学校を選んだ理由、直前に在籍していた学校の成績表に加え、その学校に知人がいる場合にはその名前(紹介状があれば添えて)などを書き添えるとよい。また在籍していた学校の校長先生の推薦状もあれば添付する。新学年は9月に始まるから手続きは前年の11～12月頃から始めるとよい。

入試のある学校は、大体1～2月頃に行われる。(学力試験に加え、面接試験や楽器演奏の実技試験のあるところもある)

校長に学校の内容などをよく問合せ、納得してから入学させることが大切。途中での転校も同様に校長に問い合わせる。空席がある場合、校長が入学させて良いと判断すれば、学期途中からでも転校可能なことがあるので、遠慮せずに問い合わせる。その点、日本より融通性があり個々の場合で違う。

長年外国人留学生を受け入れている学校では英語補修授業もある。

Prep School の例は以下。

- Hall School Wimbledon(共学校) <http://www.hsw.co.uk>
(020) 8394-6144 admissions@hsw.co.uk
17 The Downs, Wimbledon, London SW20 8HF
- Papplewick School(男子校) <http://www.papplewick.org.uk>
(01344) 621488 registrar@papplewick.org.uk
Windsor Road, Ascot, Berkshire SL5 7LH

(2)Public School パブリック・スクール

Public School の多くは、男子校は13～18歳、女子校は11～18歳の教育をしている。Boarding School(全寮生活をする学校)も相当多い。

Public School に入学するためには、男子13歳、女子11歳の学年の6月に Common Entrance Examination(CE 全国共通入学試験)を受けなければならない。しかし中には、この Common Entrance ではなく、独自の入学試験を行う学校がある。またいくつかの学校は、Year6 から Year7 にかけての CE 試験前に、Placement Test を行う。Placement Test は Public School 入学に際して、CE 同様に合否決定の重要な要素となるので要注意。また Placement Test や Common Entrance は実施しないが、面談や書類審査で入学予定者を決めてしまう学校もあるので事前に要確認。

Public School へ入学を希望する生徒は高い英語力が必要とされる。

Prep School、Public School 共に、両親が外国に居住している場合には、Half Term・春・夏・冬の休暇中、両親に代わって生徒を預かる保護者(Guardian)がいることが義務づけられている。Guardian は学校を通じて紹介される有料の専門業者や親戚・知人等。

授業料は学校によってかなり格差があるが、おおよその見当として、Boarding School の場合は約 £ 40,000～55,000 超(1年につき) 週末だけ帰宅する Weekly

Boarding、週のうち数日寮生活を送る Flexible Boarding の寄宿生はもう少し安い。Day School は約 £ 20,000 ~30,000 かかる。この他、音楽や美術のレッスン料、海外への修学旅行費、制服の費用も考慮。殆どの私立学校では優秀な学生のために学費の一部を免除する Scholarship (奨学金制度) がある。

(3)私立の 6th Form の教育機関 Tutorial College

Secondary School に付設の 6th Form よりも入学条件の融通性が大きく、また学校よりも自由な雰囲気があるのが 6th Form College や Tutorial College。

ここには A レベルコースだけでなく GCSE コースもあるので、英国の大学への入学条件を整える勉強を順に追ってすることができる。少人数のクラスで勉強できるが、費用も相当かかる。Secondary School に付設の 6th Form で受験する場合は、テスト代は授業料の中から支払われるが、カレッジでは別に支払わなければならない。

通学制・全寮制といろいろあるが、その例をいくつかあげる。

- Cambridge Tutors College www.ctc.ac.uk
Water Tower Hill, Croydon, Surrey CR0 5SX (020) 8688-5284
- Cherwell College Oxford www.cherwell-college.co.uk
St George's Mansion, 1-3 George Street, Oxford, OX1 2AR (01865) 242670
- Davies Laing and Dick (DLD) College www.dldcollege.co.uk/cms
199 Westminster Bridge Road, London SE1 7FX (020) 7935-8411
- Ashbourne College www.ashbournecollege.co.uk/
17 Old Court Place, Young Street, London W8 4PL (020) 7937-3858
- London Academy of Excellence Tottenham www.laetottenham.org.uk/
Lilywhite House, 780 High Road, London N17 0BX (020) 8352-6020
- Woodhouse College www.woodhouse.ac.uk
Woodhouse Road, London, N12 9EY (020) 8445-1210

詳細を問い合わせる機関については P. 14 参照。なお学校を選ぶとき、The British Accreditation Council (BAC)によって承認されているかどうか注意する。

6. International School

アメリカの教育システムと IB プログラム(International Baccalaureate 国際教育プログラム)の教育システムの2種類がある。一般に日本人が入学しやすい。特に英語がまだ十分でない場合は、英語の特別教育などもしてくれる。下記のような学校がある。

- International School of London www.isllondon.org
139 Gunnersbury Avenue, W3 8LG
- ACS International School www.acs-schools.com
(西) London Road, Egham, Surrey TW20 0HS
(北) 108 Vine Lane, Hillingdon, Middsex UB10 0BE
(南) Heywood House, Portsmouth Road, Cobham, Surrey KT11 1BL
- Southbank International School www.southbank.org/
(Kensington: 3~11 歳) 36/38 Kensington Park Road, W11 3BU

(Hampstead:3~11 歳) 16 Netherhall Gardens, NW3 5TH
(Westminster:11~19 歳) ①63-65 Portland Place, W1B 1QR
② 17 Conway Street, W1T 6B ③377-381 Euston Road, NW1 3AU

- The American School in London www.asl.org/
1 Waverley Place, London NW8 0NP
- Marymount International School(女子校)
www.marymountlondon.com/home.php
George Road, Kingston-upon-Thames, Surrey, KT2 7PE
- Richmond University-American International university in London
www.richmond.ac.uk/
Queens Rd, Richmond-upon Thames TW10 6JP

7. 学齢以前の教育 The Early Years Foundation Stage (EYFS)

EYFS は、0～5歳までの発達チェック・教育を含むチャイルドケア全般にかかわる。発達検査は登録した NHS-GP、ヘルスビジター、ベビークリニック、チルドレンセンターなどで相談できる。(通常 NHS に登録しておく、生後9か月～1歳時と2歳～2歳半の間に健診が行われるが、心配なことがあったら早めに相談する。) 日系医療機関の小児科医・臨床心理士にも発達相談が可能(有料)。

- (1) ナーサリースクール Nursery School・Pre Prep School・Day Nursery・Pre School
(Kindergarten は米国語なので使わない。)

<http://www.daynurseries.co.uk> <http://www.childcare.co.uk> 等のサイトで自宅のポストコードをいれると自宅近隣のナーサリーが検索できる。幼稚園風の所や保育園風の所などいろいろある。Ofsted の報告書でナーサリーの施設運営評価も確認できる。子供との相性もあるので、まずは見学の手配を取り、実際に行き雰囲気やスタッフとの話を聞いてから決めるのが望ましい。3歳以上には、公立小学校に付属した公立ナーサリーもある。公立ナーサリーの場合、保育料は無料。申込方法はそれぞれのカウンシルによって違うので、ホームページなどで確認する。通常は午前セッションか午後セッションのどちらかのみ。公立小学校付属のナーサリーに通っても、その学校のレセプションに自動的に持ち上がるわけではない。レセプションには改めて申し込みが必要である。

大半のナーサリーは私立なので保育料を払う。Full day ナーサリー (大抵 8 時～18 時まで保育) は割高。私立の場合は、日本の幼稚園と違って、週に数日だけとか、午前中だけとか、パートタイムで出席できる場所も多い。早期教育を奨励しており、遊びを通して読み書きを教える。毎日、一日中、学校へ通うことは、幼い子どもには負担が大きいから、週2回午前中だけのような短時間の保育から始めてみるとよい。

日本でも開かれている Montessori School はロンドンにも相当ある。同じ教材を使っているから、日本でその経験がある子供は抵抗が少ないと思われる。

また、ロンドンおよび近郊には日本人幼稚園・日系ナーサリーが開かれている。

- 前田学園 <http://www.maedagroup.co.uk> 事務所(020) 8343-2191
(020) 8343-2191 6 Hendon Avenue, Finchley, N3 1UE
(020) 8896-9696 Queens Drive Playing Field, Acton, W3 0HT
- Tulip London チューリップ・ロンドン <http://www.tuliplondon.org.uk>

(020) 8991-7653

St Barnabas Church Pitshanger Lane, Ealing, London, W5 1QG

- Bambini nursery バンビーニナーサリー <https://www.bambininursery.co.uk/>
Ewell Court House, Lakehurst Road, Ewell, Surrey KT19 0EB

(2) ベビー&トドラグループ・プレイグループ Baby & Toddler Groups/Play Groups

教会のホールなどを使い、一人または数人の有資格者を中心にして、親が交替で無償の手伝いをするにより運営されている。ベビーグループはまだ歩けない乳児、トドラグループはよちよち歩き・歩き始めの幼児で親子参加。プレイグループは2〜3歳から利用できる所が多い。どの地域にでもあるので、City Hall や図書館に問い合わせる。親が手伝うので費用は安く、親にとっても自分の子どもの行動、他の子どもたちとの協調の様子などが観察できる。大きさや開いている回数・時間などは、各グループで多少違うが、自分の子どもに合った回数や時間を決めると良い。プレイグループでは、日本の幼稚園と違って、何かを習うというよりも、他の子ども達の中に交ざって、社会の一員として行動する第一歩を学ぶ、あるいは経験する所という点を重視する早期教育が勧められている。場所によっては申込者が多いため待たされることもある。

8. 高校以後の高等教育

A レベルの試験が済むと、その後は Higher Education あるいは Further Education に進学する。Higher と Further の区別は、大体次のようにされている。Higher Education は大学での教育。Further Education は大学以外の教育機関、例えば College (カレッジ)、Adult Education Centre (成人教育センター) などで受ける教育で、職業教育的なところが多く含まれており、Higher National Certificate (HNC) を取得できる。しかし Further Education でも専門の Higher National Diploma (ディプロマ) 資格 (HND) を取得すると、その後大学、更に大学院への進学の道も開かれている。P.18、19 の参考資料などを参照して、どこで何を学ぶかを決め、入学手続きをすることになるが、大学とカレッジでは入学の手続きなどが異なり、また海外で高校以前の教育を終えた学生と英国で高校までの教育を終えた学生とは手続きも異なるので、それぞれの志望校の Registrar (事務局) に直接問い合わせると良い。学校の Prospectus (プロスペクタス・学校案内) を送ってもらえる。Prospectus には入学手続きの方法や学校の住所が出ている。またその教育機関が公認されていても、取得する資格が社会でどの程度認知されているかについても情報を得ることができる。

(1) 大学 University

高等教育機関の再編成により、今までポリテクニックと呼ばれていた所も大学と呼ばれるようになり、一挙に大学の数が倍増した。元ポリテクニックの大学は、実用的、職業的なコース (ビジネス・スタディ、デザイン、コンピューターなど) が充実している。英国の研究型国立大学 24 校による構成団体としてラッセルグループ (Russell Group) がある。政府や議会に大学側の要望を伝える調整機関として 1994 年に設立された。また、ロンドン大学 University of London はロンドンにあるカレッジ制の連合大学である。

イギリスの大学への出願手続きは、Universities and Colleges Admissions Service

(UCAS、ユーカス)を通してオンラインで出願する。

大学学部入学可否の判定は、A レベルの試験結果や IB 取得成績結果、高校の校長の推薦状および面接による。OxfordとCambridgeの両大学やその他の大学では専攻科目により、A レベルや IB 以外に、適正入学試験 Aptitude Test が課せられているなど志願条件があるので留意する。また Oxford と Cambridge の両大学は、他の大学に先駆けて12月～1月頃に各カレッジが筆記や面接などの入試を行う。

UCAS : Universities & Colleges Admission Service <http://www.ucas.com>

住所:UCAS, Rosehill, New Barn Lane, Cheltenham, Gloucestershire, GL52 3LZ

オンライン登録し、最大限5校までの志望校、志願学部名を書いた申込書 Application Form を送る。Application Form の申込み期限は入学する前年の9月半ばから入学する年の1月15日までだが、Oxford, Cambridge が志望校に入っている場合、または医学部・歯学部・獣医学部を志願する場合は、前年の10月15日までに提出しなければならない。更に医学部・歯学部・獣医学部志願の場合は、第5志望にそれ以外の学部を志願しなければならない。

Art/Design コースの出願方法は志望する大学によって異なるので UCAS のホームページの B コースを参照すること。

Application Form を提出すると UCAS が各大学に通知し、大学により Interview (面接)の日を知らせてくる。(Interview がない大学も多い。)その後1月～3月に各大学より合格(Unconditional Offer)仮合格(Conditional offer)あるいは不合格の通知が出る。志願者は最終志望校を2校に絞る。提携する大学間では異なる2つの分野への Dual Degree/Double Degree への出願も可能。(芸術系と科学・経済系など)

最終可否の結果は A レベルの結果を踏まえて8月半ばに UCAS から来る。

日本その他の国から Apply する時は、持っている資格が有効かどうか、過去に通学した学校の学業成績も要求され、また英語力が大学教育を受けるのに十分かどうかを判定するために場合によっては Language 試験を受けるなど総合的に判断される。

6th Form の勉強は英国の学生にとっても大変難しく、A レベルに良い成績でパスして大学に進学するのは決して容易なことではない。日本人の場合、渡英時の年齢によっては入学資格を取ることに相当の困難を伴う。また大学に入学できた場合でも、英国の大学の勉強は相当厳しいから、卒業するにはかなり努力が必要である。まず志望校の Registrar (事務局)に連絡、事情を説明して、受け入れてもらえるかを確認し、UCAS に申請すると良い。大学では直接願書は受け付けない。

但し、私立大学 University of Buckingham (バッキンガム大学)等は直接各大学に申し込む。

日本の高校卒業者や英国外の国々での大学入学資格を持つ人の為にいろいろな大学で特別コースが開かれている。入学を許可されると英国の学生と同じようにコースを取得していく訳だが、最初の一年間は英語の特訓など、英語の習得を補助するプログラムが用意されている学校もある。

例えば下記のようなコースが日本人学生に設けられている。

□ University of Kent at Canterbury (ケント大学)

www.kent.ac.uk www.kent-uk.jp (日本語サイト)

外国留学生のための特別コースは4年コースで、1年目は英語学習課程。終了すると成績によって正規の学部へ進学できる。入学資格は自国の大学進学の資格があればよいが、成績が悪ければ入学は許可されない。

□ University of London (ロンドン大学)

School of Asian and African studies (SOAS 東洋アフリカ学院)

http://www.soas.ac.uk/ifcels (020) 7898-4800

International Foundation and English Language Courses

Thornhaugh Street, London, WC1H 0XG

英国国立ロンドン大学教育事業研究所の日本人向け特別コースは、SOAS で行われ、大学進学の可能性が開かれている。1年目は大学入学の準備コース (Foundation Course) で、このコースの終わりに受けるテストに合格した者は学部の正規学生として進学できる資格がある。しかし他の英国の学生と同じように UCAS を通して応募する。

<日本国内連絡先> University Consultant Ltd. (03) 5261-0056~7

〒162-0842 東京都新宿区市ヶ谷砂土原町 1 - 2 - 38 - 402

春に入学願書を受け付け、10~11 月にテスト・面接がある。

英国は2020年1月に EU を離脱したので、EU 圏もふくめた英国外の地域から来た学生 (International student) と在英の英国籍・および英国に大学コース開始前に3年以上の英国居住歴を持つ学生 (Home Student) では大学の授業料が大幅に違う。

International Student fee は各大学の裁量で設定でき、Home Student fee (2024年度は最大 £ 9250/年) の約2~3 倍以上 (£ 10,000~26,000/年、医学部などは £ 67,000/年) と高額である。学費は年々値上がり傾向にある。そのため、Home student は英国政府から Student Loan 学生ローン (大学および大学院の授業料 school fee とその間の生活費 maintenance loan) を借りることができる。

maintenance loan の支給額はその学生の同一生計世帯の所得水準により審査があり一律ではない。近年、返済の条件やローン利率が変更になることがあり、卒業後の返済計画などに注意が必要。医学部の Home Student には、卒業後に NHS の病院で2年間勤務することが条件で最後の2年間の授業料を返済不要の奨学金として授与する制度がある。

学位 Bachelor Degree (BSc., BA) を取った後、大学院の修士コース Post Graduate Course (MA, MBA) に進学する場合は、UCAS を通すのではなく、自分の志望大学の志望学部直接向け Apply する。日本の大学の学部を卒業していれば資格はある。

(2) Non - degree Student

学位を取るために正式に入学するのではなく、短期間だけ在学することが可能。大学により、またコースによりかなり事情が違うのでまず問い合わせをすること。授業料もコースにより違うので、この点についても志望大学の Registrar に問い合わせる。試験が受けられるコースもあり、それが自国の大学で単位として認められる場合も多くなっている。入学手続きは、学年始めの10月に入学する時には、大体2月頃までには済ませた方がよいが、空席があれば6月頃でも入学させてもらえることもある。それまでの学業成績、学業と人柄についての先生の推薦状を Application Form に添付し提出すると、費用の支払い能力があるか否かを書面で確認される。面接による英語テストによって入学を

断られることもある。なお、提出する書類はいずれの場合でも英文のものを作成してもらうことを忘れないように。自分で英訳した書類は受け付けてくれない。

9. Language School(語学学校)

ロンドンには私立の語学学校は多数ある。個人の目的、条件に応じてインターネット等から情報を得て選ぶと良い。British Council 公認か否かも選ぶ時の一つの目安。ロンドン市内のカレッジでも English as a Foreign Language のコースのある所もある。

Private Tutor(個人レッスン)を希望する場合には、知人の口コミ、日本人向け情報サイト Mixb (www.mixb.net)などを参照。

18歳以上の者は Adult Education Centre(地域の成人向け講座)でも ESOL(英語講座)があるが、短期滞在者は受け入れない場合もある。

参考までにいくつか私立語学学校をあげておくと、

- ELT 英語学校(託児所あり) www.eltschool.co.uk
- International House London www.ihlondon.com
- Berlitz School of Languages www.berlitz.co.uk
- その他の英語学校の詳しい情報は下記参照。

Association of Recognized English Language School (ARELS)
www.arel.org.uk/

10. 学習塾

- Ena www.enalondon.com
(Ealing) 33 Hanger Lane, London, W5 3HJ (020) 4537-3407
- JOBA International London joba-uk.jolnet.com/ (020) 8343-4332
(Finchley) 1F Lawford House, Albert Place, Finchley, N3 1QA
(Acton) The Ellen Wilkinson School, Queen's Drive, Acton, W3 0HW
(Wimbledon) Ricards Lodge High School, Lake Road, Wimbledon SW19 7JG
- Kumon Europe & Africa Limited www.kumon.co.uk (0800)854-714
4th Floor West, Ealing Cross, 85 Uxbridge Road, London, W5 5TH
- 早稲田アカデミー ロンドン校 (020) 8993-7624 www.waseda-ac.co.jp
Unit 4, Acton Hill Mew, 310-328 Uxbridge Road, Acton, W3 9QN

11. 教育機関の情報を得るには

学校や教育について問い合わせをする時には、男女別・年齢・教育歴など必要なインフォメーションや学校の種類や場所などの希望をはっきりと述べ、それに適した学校を紹介してくれるように依頼すること。

渡英前、あるいは帰国後に日本で相談する機関としては、

- 海外子女教育振興財団 http://www.joes.or.jp e-mail:service@joes.or.jp
東京 (03) 4330-1341
〒105-0002東京都港区愛宕 1-3-4 愛宕東洋ビル 6F
大阪 (06) 6344-4318

〒530-0001 大阪市北区梅田 3-4-5 毎日新聞ビル3階

- フレンズ帰国生母の会 <http://www.fkikoku.sun.bindcloud.jp>
東京 (03) 6633-4096
〒100-0005 東京都中央区銀座 5-3-16 日動火災・熊本県共同ビル
海外での生活経験のある母親たちで運営されているボランティア団体。
「高校案内」「大学案内」を出版している。
- 文部科学省 CLARINET(Children Living Abroad and Returns Internet)
帰国生の転編入情報サイト http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/clarinet

英国の教育事情一般については

- British Council(月～金 10:00～18:00) <http://www.britishcouncil.org>
(0161) 884-0291

私立学校についての情報は

- Gabbitas Educational Consultants Ltd. <http://www.gabbitas.com>
(020) 7734-0161
4 Carlton Gardens, St James's, London, SW1Y 5AA
＜日本国内連絡先＞
渡邊オフィス(旧 Gabbitas 日本支社) <http://www.woffice.jp>
e-mail: info@woffice.jp
(03) 3336-0591
〒165-0035 東京都中野区白鷺 2-6-22-301
- ISC (Independent Schools Council) <http://www.isc.co.uk> 全英私立学校協会
(020)7766-7070 個人的なアドバイス・サービスもあり、有料。
海外からの入学手続きのアドバイスもするので、日本から手紙で連絡できる。
- Euro - Japanese Education Services <http://www.ejef.co.uk>
岩永照子 EJEJ Study Centre (01494) 882091
スペシャル・アドバイザーが個人的に相談を受ける。予約制(有料)

カレッジ(私立)についての情報は

- The British Accreditation Council <http://www.the-bac.org>
(0300) 330-1400 info@the-bac.org
14 Devonshire Square, London, EC2M 4YT

海外からの学生のためのインフォメーション・サービスは

- U.K. Council for International Student Affairs (UKCISA)
<http://www.ukcisa.org.uk> (020)7288-4330
1st Floor, Noble House, 3-5 Islington High Street, London. N1 9LQ

下記の本は、学校や専攻科目(大学・カレッジ)のリストや情報提供の目的でつくられたもの。大抵の図書館に備えてある。貸し出しはしない。書店で買える参考本もある。

- Public and Preparatory School Yearbook(男子校と共学校)
- Girl's School Yearbook(女子校)

- The Big Official UCAS Guide to University and College Entrances
<http://www.ucas.com/>
- Independent and State Schools School Guide (Daily Telegraph 社発行)
- The Times Good University Guide (The Times 社発行)
- University Degree Offers (Trotman 社発行)

12. 学校関係の用語(日英対訳)

- **Gap Year** :セカンダリースクールを終えてからすぐに大学などに進学せずに社会経験を積むために働いたり、旅行などを通して見聞を広めたりする期間。かつては進学予定の大学に籍を置いたまま過ごすことが多かったが、最近では日本の「浪人」のような位置づけで A レベルを再受験するために 6th Form College などへ通う場合もある。
- **ABRSM**: 王立音楽検定協会 www.gb.abrsm.org 各楽器について **Grade**(グレード) 1~8及び **Diploma**(ディプロマ 4 種)を検定する協会
グレード1が初心者レベルで、グレード8は音大入学レベル。その上にディプロマがある。ディプロマの **FRSM** はプロの演奏家レベル。試験は課題曲実技と、音階演奏、初見演奏、口頭で答える楽典(Aural)試験で審査があり、ディプロマはそれに加えてエッセイや面談もある。グレード試験の結果は **Distinction**、**Merit**、**Pass**(ここまでが合格)、**Fail**(不合格)の4段階評価。楽器で **Grade6** 以上を受けるには、セオリー(楽典)試験の **Grade5** に合格していることが必要条件。オンライン受験(ビデオ)もできる。
- **11+paper**(イレブンプラス):11 歳(Year6)で受ける **Grammar School**(試験がある公立学校)入学試験
- **Common Entrance Examination(CE)**:13 歳(Year8)で受ける共通私立学校入学試験
- **Home-School Agreement**: 両親やガーディアンが児童に良い教育を受けさせるため協力することを確認する誓約書

[学校制度]

education authority	地域の教育当局
state school	公立学校
independent school	私立学校
pre - school education	学齢以前の教育
nursery school / kindergarten	幼稚園
primary school	小学教育(5～11歳)
infant school	小学校(5～7歳)
junior school	小学校(7～11歳)
secondary education	中学・高等教育(11～18歳)
boarding school	寮制の学校
day school	通学生だけの学校
day boy (girl)	自宅からの通学生
full boarder	学期中を通して寮に いる生徒
weekly boarder	月～金は寮で週末は 帰宅で過ごす生徒
academic year	学校生活の1年 (9月～)
Michaelmas Term	秋学期(9月～12月)
Lent Term	冬学期(1月～3月)

Grammar School	公立中学校(選抜)
Comprehensive School	公立中学校
selective school	公立中学校 (試験合格者対象)
Preparatory School	5～13歳の私立校
Public School	13～18歳の私立校
6th form	義務教育以後の 高等教育
co-education school	男女共学校
catchment area	公立学校の通学区域
Year ○	○年生(米国英語の Grade は使わない)
Term	学期
Form	クラス
half term	学期半ばの休暇 (1週間程度)
exeat エクゼアット	Half term の前後に ある週末の休み
Streaming	能力別にクラスを分 けるシステム

[入学に関して]

prospectus	学校案内パンフレット
entry	入学
admission	入学許可
vacancy	空席
candidate	受験生
sit entrance examination	入学試験を受ける
take papers	筆記試験を受ける
fee	授業料を含む諸費用
scholarship	奨学金
bursaries	低所得家庭用奨学金
exhibition	奨学金試験健闘者(合 格には足りず)に与え られる奨励金

verbal reasoning test	言語能力試験
non-verbal reasoning test	数字・図形認識 能力試験
interview	面接
withdrawal	自己意志による退学
expel / expulsion	学校による退学処分
denomination	宗教の教派
non-denomination	特定宗教の教派の 指定なし

[学校生活]

headmaster	校長
headmistress	女性校長
house master	寮の全責任を預かる教師
matron	寮母
sister	学校保健室の看護婦
head boy(girl)	主席生徒
prefect / monitor	監督生
house	全校生徒を縦割りにしたグループ(スポーツ試合などをするとき。ハウス対抗) 寮のある学校は寮のこと。
mock test	模擬テスト
commendation	賞
tea and buns	3時のおやつ
high tea / supper	夕食
test	小テスト・単元テスト
exam / trial	定期筆記試験
Maths	算数、数学 (米語では math と表記)
leaver	卒業生
Speech Day	6・7月の年度末修了式/ 賞授与式

absence from school	欠席
registration	出欠の確認
report	成績通知票
lesson / period	授業時間
break	休み時間、休暇
written notification	書類による欠席などの届
parents' evening	父母会(大抵夜にある)
house point	学校生活の中で、良いことをした時には＋、悪いことをした時には－が各生徒に教師によって与えられる。
packed / picnic lunch	弁当(サンドイッチなど)
fixture	(期日が決まった)試合、競技会
match	対抗試合
squad	選抜チーム
P.E. (physical education)	体育
appeal	募金、寄付
detention	居残り(罰として放課後残る)
suspension/ rustication/detention	停学
expel / expulsion	退学

[学用品]

tuck shop	学校の売店
rubber	消しゴム
biro	ボールペン

(exercise) book	ノート
ruler	ものさし

一口メモ 国際児童文庫協会 (International Children's Bunko Ass.)

<http://www.kodomobunko.org.uk>

国際児童文庫(IC 文庫)は、二つ以上の言語や文化に幼い時から接し、その環境で育っている子どもたちを対象にして活動しているボランティア団体で、現在英国全体で35文庫が活動している。日本語の絵本の読み聞かせや紙芝居を通じて日本語に接したり、日本の歌やゲームをすることで友達と日本語による交流をはかったりして、学習とは違った自然な形で日本語や日本文化を子どもたちに経験させている。

[服装]

uniform	制服
mackintosh	レインコート
cloak	マント
wellington	ゴム長靴
pullover	セーター・トレーナー (フード付き)
jumper / jersey	セーター
school tie	学校制定のネクタイ
school badge	校章(胸につけるワッペン)
swimming trunks	男子の水泳パンツ
swimsuit	女子の水着
duvet	掛け布団

laced shoes	ひも靴
plimsolls	運動靴(ズック)
trainers	運動靴
P.E. shoes	体育用運動靴
P. E. (sports) kits	体操用服装一式
trousers	ズボン (米国英語の pants は下着を指す)
vest	ランニングシャツやチョッキ
sweatshirt	厚手木綿ジャージのシャツ
gear	衣服(インフォーマル)
mufti	平服
home clothes	衣服(普通使う言い方)

一口メモ 国際的な子の連れ去りの民事上側面に関する条約(ハーグ条約)

日本では、ハーグ条約の締結が2013年に国会で承認され、2014年4月より発効。この条約は、国際結婚家庭だけが対象になっているのではなく、両親、子どもの国籍とは無関係に、国境を越えて移動する16歳未満の子どもを持つ家族がその対象となる。不幸にして両親の結婚生活が破綻して別居や離婚となった場合、子どもの生活基盤が急変して発生する子どもへの影響を出来るだけ小さくする、すなわち子どもの幸福を最優先するべく出来た条約である。詳しくは下記のウェブサイトを参照。

外務省ホームページ:<http://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/hague/index.html>

在英国日本大使館ホームページ:

http://www.uk.emb-japan.go.jp/itpr_ja/oyako.html